

金田一真澄『ロシア語時制論 — 歴史的現在とその周辺』

三省堂、1994, xiv + 598 p.¹

本書は博士論文として書かれたものであると聞いているが、それにふさわしく、内容が重厚であり、文献に対する目配りもよくできている。「歴史的現在」およびそれに付随する諸問題について、学問的、且つ統一した方法的取扱いをしたものとしては、少なくともロシア語学に関しては、本邦における最初のものであり、斯学の水準を示すという意味において、その意義には格別のものがあるといえよう。

「歴史的現在」は、著者のいうように、印欧語に限っても広く認められる現象であるが、「歴史的」と「現在」という、いわば形容矛盾を伴った用語が既に示しているように、狭義の文法論の問題ではなく、他の時称ばかりでなく、法、アスペクト、話法など、他の文法現象とも密接に関連し、文学、修辞学、文体論、語用論などとも境を接する範疇であって、その取扱いは ad hoc にはともかく、理論的にはさまざまな困難を伴っている。

著者はこのことを充分承知しつつ幅広い取扱いを志しながら、他方では時制を Benveniste、Weinrich、細江逸記などのように、コミュニケーションや話者の modality の表現に解消したり、時制をアスペクトに従属させることなく、時制論の枠を堅持しながら、問題を考えようとしている。その際に、著者は発話の時点と関連させる絶対的用法と、文脈と関連させる相対的用法とを区別する。現在形の用法の基本的な分類はいわゆる 80 年文法に依拠しており、さらに明示的な定義はされていないが、不完了体現在形の場合広い意味での発話時を含む時的空間に妥当する直接的用法と、発話時を含まない転義的用法とを区別しているようである。このような分類においては、「歴史的現在」が転義的用法に含まれるのは当然と考えられる。

したがって著者によれば、不完了体現在の用法は次のようになる。

不完了体現在の用法

I 直接的用法

- 1) 現実現在 (1)
- 2) 非現実現在
 - a. 基本タイプ
 - α 恒常的現在 (2)
 - β 抽象的現在 (3)
 - b. 周辺タイプ

¹ 『ロシア語ロシア文学研究』 第27号 平成7(1995)年9月1日 91-97頁。

α 描写の現在 (4)

β 注釈の現在 (5)

II 転義的用法

1) 歴史的現在 (6)

2) 未来表現の現在

a. 意図的行為の現在 (7)

b. 想像的行為の現在 (8)(pp. 18-21)

ここで用法の最後に付した番号は、著者のつけたものである。

完了体現在形の用法についても、著者は基本的に80年文法に依拠している。すなわち、

- (1) 未来における具体的な一回の行為
- (2) 未来の習慣的反復行為 (例示的用法・未来)
- (3) 抽象の現在 (例示的用法・現在)
- (4) 過去の習慣的・反復的行為
- (5) 現在における強い否定 (否定辞を伴って)
- (6) 過去の強い否定 (否定辞を伴って)
- (7) 過去の突然の行為
- (8) *быть*の現在を表す用法 (pp. 22-25)

「歴史的現在」の基本的職能については、著者は時制と体の二つの要因からこれを規定している。時制に関しては、話者は過去の出来事を過去形によっても現在形によっても表現できる、恣意的なものであることを、Золотоваならびに Пешковскийを引用しながら次のように述べている。これは本書の核心となるべき作業仮説の一つであるから、少し長い引用することにする。

「このように、時制と発話時との関係は確かに密接であるが、発話時自体が話者の主観によって自由に移動できるということから、“文法的起算点”を出来事時に置くことによって、過去の出来事が現在形で表されるという状況が生じ、その結果、歴史的現在用法が生まれることになる。

しかし発話において、話者が主観的に文法的起算点を移動させることができるにしても、全く恣意的ということはありません、そこには何らかの傾向なり、どちらかが選択され易い要因なりがあるように思われる……」(p. 135)

このような傾向は著者によれば、次のように考えられる。

一般に過去の出来事が、一言で伝えられるような短い情報の場合は、話者は過去の出来事を現実の発話時を基準にして、そこから振り返る視点で話す。つまり、回顧的視点から過去形を用いて話すのである。ところが、過去の出来事がある程度以上に長い情報で、しかもその情報の中に時間的展開 (ストーリー) を含むような場合には、

話者は回顧的視点から語るよりも当時の出来事時から同時進行的に語る方が楽となる
……」(ibid.)

また体については、次のようにいう。

「もう一つ重要な点は、話者がストーリーを有する過去の出来事を語る場合、述語動詞の表す時制的機能よりも、そのアスペクトの機能の方が優先されるということである。ストーリーの展開を叙述する際には、各行為が過去のことか現在のことかという情報よりも、各行為が完了的か持続的か、逐次的か同時的かといった情報の方が遙かに重要である。」(p. 136)

このように考えるならば、いわゆる「歴史的現在」において上述した完了体現在の用法の持つ、時制の側面が捨象されることになるのは、論理的に当然ということになるだろう。

更に著者は機能的観点から、コミュニケーションにおいて話者が無意識あるいは自然に一定の言語形式を選択する場合と、聞き手に一定の効果を与える目的で、意識的にこの選択を行う場合とを区別し、後者を「レトリック」と定義する(p. 138)。この立場から著者は、この区別は英語においては Leech が行っているが、Бондарко はこの違いを区別せず、話し言葉と書き言葉の歴史的現在を区別したものの、すべてレトリックにおける歴史的現在しか取り扱わなかったと批判し、たとえば個人的体験談や民話などに頻出する говорить には、Я ему говорю... のように生き生きとした描写効果がないのに、вижу が臨場感を生むのは、Бондарко のいうように、前者が使い古されて摩耗したからではなく、話し手の自然な選択であるためであると指摘している(pp. 138-139)。これは極めて重要な指摘である。これが作業仮説の第二である(尤も仮説の順番は評者の恣意に過ぎない)。

一方、著者はコミュニケーションの種類を、次のように分類する。すなわち、

- I 話し言葉(民衆の話し言葉 etc.)
- II 文学作品等における談話(会話)
- III 物語(文学作品等の地の文等)
- IV 書き言葉(記録、説明のテキスト — ト書、要約、年表など)(p. 83)

このコミュニケーションの種類を仮にテキストの種類ということにすれば、上述の「現在形」の用法は、これらのテキストの種類にしたがってどのような具体的な現れ方をするか、またその体系の中で、いわゆる「歴史的現在」がどのような特色を持つか、ということが問われることになる。本書の理論的核心となるべき作業仮説の第三であり、著者はこれらの作業仮説を総括する形で、本書を構想している。これを著者に従って紹介すれば、次のようになる。

第1章 ロシア語の「歴史的現在」の規定、古い時代から現在までの歴史的現在の用例

を渉猟して全体像を求め、その用例の4分類を提示する。

第2章 話し言葉の歴史的現在。

第3章 談話レトリックの歴史的現在。

第4章 物語レトリックの歴史的現在。

第5章 自伝文学における語りの現在時制用法。

第6章 「夢」の描写における現在時制用法。

第7章 自然描写における完了体現在の例示的用法 (p. 84, pp. 140–141)。

明らかなように、第2章と第5章とは主として自然な、非レトリックなもの、第3章と第4章とはレトリックの中での歴史的現在をそれぞれ扱っている。

理論的な意味で注目すべきことは、体と時制との関係である。従来は、可能性としては、体をヒエラルキーの上位の概念とし、時制を下位の概念とするか、あるいは逆に時制を上位の概念とし体を下位の概念とするかの何れかであると、考えられてきたと思われる。

これに対し、著者は、話し言葉の歴史的現在と関連して、ツルゲーネフの『獵人日記』を分析し、物語的場面の叙述をこととする「物語体」と、専らストーリーの展開に必要な状況説明を行う「説明体」とを区別した場合、前者は完了体過去／不完了体現在（過去）、後者は不完了体過去（現在）／完了体現在を基本的な対立とすると結論づけている (pp. 163–192)。著者の図式を引用すれば、これは次のようになる。

- I. 物語的場面の叙述 (物語体) <前景化>
 - 1. 非持続的な中心的行為 ... 完了体過去
 - 2. 持続的行為・状態による付帯行為 ... 不完了体現在
 - 3. 持続的・反復的行為 (2と競合) ... 不完了体現在
- II. 人物・情景の説明的・習慣的描写 (説明体) <背景化>
 - 4. 説明一般に使用 (習慣を含む) ... 不完了体過去
 - 5. 習慣的な逐次的、因果関係的行為 ... 完了体現在
 - 6. 習慣的な持続的行為 (4と競合) ... 不完了体現在
- III. あらゆる場面において (7は主にI.の場面で)
 - 7. 発話行為動詞 ... 不完了体現在
 - 8. ペルフェクト的表現 ... 完了体過去 (p. 190)

これはショーロホフの『人間の運命』、『長司祭アヴァクーム自伝』、レスコーフの『魅せられた旅人』、アフナーシェフ編『ロシア民話集』、プリーナ等にも基本的に適用できるとする (pp. 192–215)。

このような結論は、従来論じられてきた文法的範疇の対立の仕方とははっきり異なっ

いる。著者はЗолотоваに代表される「時制の相対的用法」による説明の限界性を指摘する。相対的用法は発話の視点から事件に対する共時的視点へと「描写の視点」を移行させることによって成立するものであるが、実際のテキストにおいては、歴史的現在と過去形が混在しており、その度に「視点の移行」が生じるとは考えにくいからである。ここから著者は「話し言葉の歴史的現在」の大枠的環境として、A面とこれを背景にし、これに含まれるB面を考える。すなわち、

A面 回顧の視点からの語り（対話の時制体系の延長）

時制体系：話し手と聞き手に共通する発話時基準のシステム

使用時制：過去形（話しの内容が過去の出来事であるから）

B面 共時的視点からの語り（独白固有の時制体系）

時制体系：過去の出来事の推移に沿った時間面を基準としたシステム

使用時制：現在形と過去形の混在時制 (p. 221)

B面におけるこのような時制の混在を、著者は、アスペクトの相違を時制の相違に投影するところから生じると考えている。このことを著者は次のように説明している。理論的に極めて重要な指摘であると思われるので、少し長いが引用することにする。

「実況放送」型の情報伝達においては、言葉と独立して存在する実時間の一定不変の推移の中で、伝達行為と伝達される出来事の進展とが同時進行的に行われる。一方「体験談」型の情報伝達においては、過去のあるまとまった出来事（ある程度の時間的幅を有する）を、当時の出来事の時間的ながれと隔絶した“現在という場”の中に、言葉を連ねることによって再構築して伝えなければならない。

従って、「実況放送」型の情報伝達の“場”では、実時間の流れと同時進行する“今”を基準とした座標系に照らして行為の時間的位置を示すことに時制の基本的役割が向けられるのに対して、「体験談」型情報伝達の時制システムでは、行為の時間的前後関係だけではなく、出来事の時間的流れ（逐次性）や時間的幅（持続性）を現在の情報伝達の“場”の中に独自に組み立て、過去の出来事の時間的展開を示すことに、かなり大きなウェイトが置かれることが想像される。そこではストーリーをのせてやるための新たな虚構的な時間の流れを作り出してやらねばならない。そしてそれは、述語動詞によって表された様々な行為の積み重ねによって初めて可能となるのである。

.....

より具体的にいえば、聞き手にとって時間的推移はまず何よりも状態の変化や行為の積み重ねによって知覚されるものであるから、「体験談」型情報伝達システムにおいてより重要なことは、語りの中の述語動詞によって表される行為が、“持続的”であるか“非持続的”であるか、“反復的”であるか“一回的”であるかといった、“時制的（時間的）”というよりもむしろ“アスペクト的”性質を示すということにある。この

ような情報伝達上の必要性から、時制の転義的用法が生まれてきたのではないかと考えられる (pp. 226-227)。

このような観点から著者はB面の語りについて、次のような体・時制の分布を考える。

- I. 「物語体」物語の場面の叙述
 - (1) 非持続的・完結的行為：＜完・過去＞
 - (2) 持続的行為・状態：＜不完・現在＞
 - (3) 持続・反復行為：＜不完・過去＞
- II. 「説明体」状況の説明的描写
 - (1) 説明一般（含習慣）：＜不完・過去＞
 - (2) 習慣表現
 - a. 連鎖的・逐次的行為：＜完・現在＞
 - b. 持続的行為 ：＜不完・現在＞
- III. あらゆる場面において（主に「物語体」）
 - (1) 発話行為 ：＜不完・現在＞
 - (2) ペルフェクト的行為：＜完・過去＞ (p. 229)

このように著者は体と時制の組み合わせられたものを一つの単位としてその全体にアスペクト的意義の投影を見ようとしており、その点で著者の考えは従来の枠を破った斬新なものであると思われるが、この図式を見れば、やはりここにも完了体・不完了体の区別が存在していることも否めない。この図式の内部における体と時制の関係をどのように考えるかは、今後の問題であろう。また発話行為を表すものが不完了体現在になる強い傾向があることは事実であるが、これをオースチンの意味での「遂行動詞」performative verbsであると考えれば、著者のいうように、登場人物にとっての発話の時間を語り手にとっての発話の時間に容易にすりかえることができるためかもしれないし (p. 235)、あるいはまたいわば単なる *кавычки* の役をするに過ぎないためかも知れない。

これだけ内容のある大部の書物であるから、軽々に扱うことはできないので、紙幅の都合で第二章迄しか評言はできず、また若干考えていることをこの際述べさせてもらいたいとも思ったが、到底かなわぬことである。ただ一言申し述べて置きたいことは、最近の内容的類型学の進展によって、アスペクトと時制の関係は、どちらかが上位の範疇であるというようなものではないことが示唆されていることである。このことは、著者の考えの妥当性を指示するもののようであるが、同時に著者の考えは更に検討をする余地を残しているともいえる。今後の課題であろう。

結論として、熟読玩味するに足る、好著であるということは確かであって、このような書物の評をする機会を与えられたことを感謝するのみである。